

スポーツの世界で人々の
熱視線を集める大会やイベント。
そこには必ず戦いの舞台を
支えるモノとヒトが存在する。
株式会社アクティオも
スポーツを支える企業のひとつで
ビーチバレーボール国際大会の
設営という大きな役割を担っている。
後編はビーチバレーボール試合会場の
仮設スタンドができるまでの
ストーリーを紹介する。

〈後編〉

スポーツの 舞台を支える

モノ

と

ヒト





会場となった東京都品川区にある潮風公園

スタンド席

2019 FIVB ワールドツアー 4-star 東京大会

アクティオが、社会貢献とともに成長事業と位置付けているのが、スポーツにおける会場設営サービス。そのビッグプロジェクトの1つが、FIVBビーチバレーボールワールドツアーである。

昨年もワールドツアー東京大会において、仮設スタンドの設営施工を行い、大会の成功に貢献した。しかし、今年はさらにイベントの注目度は上がり、アクティオにとっても、よりスケールが大きく、よりタフなプロジェクトとなった。7月24日から28日の日程で行われたワールドツアー東京大会は、昨年の「3-star」から「4-star」へと格付けが上がり、世界の名だたるトッププレーヤーが集まるメジャーイベントとなった。さらに重要なのは、東京五輪ビーチバレーボール競技のテストイベントに指定されたこと。他のスポーツでもプレ大会は行われるが、本番と

場でもある潮風公園（東京都品川区）は水はけが悪く、仮設スタンドの足となる無数の鉄柱の下は、ぬかるみやすい「土」。重機が立ちこちでスタックし、移動もがままならないほどであった。

総重量64トンにもなる仮設スタンドも沈んでしまうため、荷重を分散させるように、鉄柱には通常よりも大きな木製パネルを基礎として設置。スタンドが水平を保つように念入りに配置した。またコート三方を囲むスタンドの設営は高所作業の上、雨により滑りやすいため、注意深く足場を組み、安全を最優先に施工していった。

本来、作業員60名の安全とスタンドの完成度を考えると、雨天での作業は行いたくない。しかし大量の砂を投入するコート、付随する建物の設営など様々な作業が同時進行する中、工期を伸ばすことも変更することもできない。夜間作業も難しく、時間的にも失敗が許されなかった。

工事の確実性、安全性とともにスピードも求められたこのタフなプロジェクト。だが、現場で指揮を取ったブラザ事業部の大塩康平氏は予想以上に順調に進んだと言う。「天候が悪いことは当初から想定していましたし、昨年のノウハウが生まきました。昨年、設営を行った作業員が中心となり建てたので、すべてがスムーズに運びました」

こうして完成した1960席の仮設スタンドを配した今年のワールドツアー東京大会。大会自体も台風6号による風雨に見舞われたが、仮設スタンドにはまったく影響はなく、5日間に渡り詰めかけた観客を、早朝からナイトゲームに至るまで「文字通り」支え続けた。昨年と同様のサイズのスタンド、同様の作業であった。しかし昨年は晴天が続く中、設営しやすいアスファルトの駐車場の上にスタンド



07

アクティオのノウハウはアーバンスポーツと、どのようなシナジーを生み出すのか



03



02



01



06



05



04

- 01 芝生の上に木製パネルを基礎として設置
- 02 無数の鉄柱を組み立てていく
- 03 雨が降っているため、より安全性を重視して施工
- 04 ひとつひとつの作業を確認しながら進めていく
- 05 スタンドの骨組みが立ったら座席の足元へ板をはめていく
- 06 長椅子用の座席を設置し完成
- 07 1960席の仮設スタンドと照明のスタンドの施工完了

MAKING STORY

同じ会場、ほぼ同じ日程で、同じく海外からハイレベルの選手が集まる競技は少ない。まして仮設競技場を設営から行うので、選手、観客のみならず、運営、設備にいたるまで、真のオリンピックテストにふさわしいイベントである。輪を掛けてプロジェクトをタフにしたのは設営時の天候。暑さは想定されていたが、施工を行った7月中旬は活発な梅雨前線が日本列島に停滞し、天候は不安定に。東京は6日連続で雨に見舞われていた。工事を開始した16日も1日の降水量が34ミリを記録する雨となった。

安全を最優先に施工

ヘルメットに当たる雨音が時折、大きくなる中、工事は慎重に進んでいった。東京五輪の会

を建てた。それゆえ今年はよりタフな施工であったことは間違いない。しかも昨年よりも工期に余裕を持って完成したという。それは大塩氏が言うように、昨年蓄積された技術、経験によるところだろう。

環境に左右されない設営技術

近年、ビーチバレーボールはビッグイベントを海岸ではなく、市街地で行うことが増えてきた。オリンピックの新種目となったスポーツクライミング、スケートボードなどはアーバン（都市型）スポーツと呼ばれるが、これらもスタジアムへ行き観るスポーツではなく、スポーツのほうから街の中へやってくる競技である。

すなわちこれらのスポーツでは街の中がスタジアムになり、そこには大型の仮設スタンドが建てられる。そのスタンドでは今回のように天候、工期、土地に左右されない設営技術が求められている。

日本国内でもこれからアーバンスポーツが、都市を巻き込みながら発展する可能性が高い。ワールドツアー東京大会で培ったノウハウを持つアクティオが、ビーチバレーボールをはじめアーバンスポーツと、どのようなシナジーを生み出すのか。これからの楽しみである。

